

教育長室だより

第 25 号

2021.4.15

新学期が始まり1週間が過ぎました。思えば昨年度は年度末から引き続き一斉休校の最中でした。そして今まだコロナ感染症の終息がみえないばかりか、ここに来て変異ウィルスの猛威にさらされ、第4波と言われる再拡大の状況にあります。

昨年度は学校や子どもたちの努力で、教科学習についてはその学年の目標を達成できましたが、多くの学校行事が完全な形ではできませんでした。本年度はできるだけすべての教育課程が実施できる状況になることを祈りたいと思います。

○

いうまでもなくコロナはわたしたちの社会に様々な困難をもたらしています。経済的な困窮や心理的負担など挙げればきりがありません。

そのなかで子どもたちにも深く関係する心の問題について考えた説を見つけたので紹介します。

このことについて東畑開人という心理学者がカウンセリングの経験を元に次のように述べています。(一部抜粋)

○

「…前略…昨年の夏前から学校に行けなくなり、部屋にひきこもりがちになった高校生がいました。初めてカウンセリングにやってきたとき、彼が語ったのは、ごくごく小さな話でした。苛立った親に日々追い詰められていること、……中略……よくよく話を聴いてみると、彼の苦しみの深いところに、コロナの影が差していることがわかってきました。両親が苛立ちやすくなったのはリモートワークがきっかけでした。毎日同じ場所にいることで、以前から不仲だった両親の喧嘩は増え、それが彼を追い詰めていました。あるいは以前から勉強が遅れがちだった彼は、オンライン授業になっていた期間に、授業にまったくついていけなくなりました。教室にいれば友人や教師に助けを求めることもできたけど、それが難しくなってしまったからです。

こういうことです。コロナは心に新たな問題をもたらしたのではなく、……中略……問題を覆い隠していたヴェールを、コロナが剥ぎとったのです。……中略……さて、重要なことは、このヴェールが心にとって、きわめて貴重なものであったことです。「問題を覆い隠す」というと、悪いことのように聞こえるかもしれませんが、……中略……だけど、心の場合は違います。心の問題はいつでも直面化すればいいものではないからです。心も人間関係も本質的に矛盾に満ちたもので、問題を抱え続けるものです。ですから、人生にはそういう矛盾と向き合った方がいいときもあるのだけど、とりあえず先送りした方がいいときもあります。余裕がない時に、問題と向き合おうとするならば、破壊的なことが生じてしまうこともあるからです。そういうとき、先送りによって、時間を稼ぐことが助けになります。時間は心の良薬です。……中略……問題と向き合うのは、そうやって余裕ができてからでも遅くない。ですから、ヴェールがきちんと存在してくれると、心は助かります。

それでは、この失われてしまったヴェールとは一体なんだったのでしょうか。つまり、コロナは私たちから一体何を奪っていったのでしょうか。これを私は人と人との間で交わされていた「ケア」だと考えています。……中略……たとえば、あの不仲の両親は職場で雑談をしたり、飲み会に行ったりすることで、ケアされていました。外でケアを得ることで、家庭をギリギリのところまで保っていたのです。彼もそうです。教室で授業を受けていると、わからないところは友人が教えてくれたし、廊下で心配した教師から声をかけてもらえることもありました。そういうケアがあることで、かろうじて授業についていくことが可能になっていました。

つくづく体は便利だと思います。何に困っているのか、言葉にするのが難しいときでも、体があればモジモジしているだけで、相手に心配してもらうことができました。体は飛沫をまき散らし、ウィルスを運ぶ危険なものでもあるけれど、同時に効率的にケアを運ぶ高性能の乗り物でもあったわけです。

○

毎日人と会う中で心のケアがなされていたのに、コロナはこの「会う」を奪うことになったというのです。問題と直面するのは少し先送りする方がいい場合もあるというのが心理学者ならではの慧眼だと思います。

そしてこの後も話は続き、もっと大事なことが言われています。

それは“体を同じ場所に置く”(つまり会う)ことができなくて、電話やリモートでの会話だけになった場合、「言葉」によってケアするしかないということです。

○

学校でも同じことが言えそうです。担任の先生はいつもと違う暗い顔の子に「どうかしたの?」と声をかけることができます。うれしそうだと「何かいいことあった?」と話すことができます。友達同士も同じように、姿や表情で伝わることについて話ができます。人と会わなくなるということはそういう細かなコミュニケーションがなくなり、小さいけどこまめな“ケア”がなくなるということなのでしょう。

○

この“会う”ことによって可能だった、小さくこまめな互いのケアに代わって、言葉だけでおなじようにケアするのはどれだけ難しいかについても上の言葉で語られています。でももし会えなくなったら言葉に頼るしかないとも言います。

○

新学期が始まり、子どもたちの元気な声が学校に戻っています。毎日、子ども同士、子どもと教師のコミュニケーションがとられているはずですが、そこには逆にストレスの元になることも少なくないと思いますが、同時に数え切れないほどの“ケア”がなされていることを上記の文章は教えてくれます。

なんとしても昨年のような一斉休校は避けたいものです。それは単に学習が遅れるからというだけでなく、子どもの心を支えるだいじな“ケア”がなくなることにつながるからでもあります。

力を合わせてコロナと戦いましょう。